

沖縄県におけるインフルエンザ発生動向報告(2008年)

古謝由紀子・下地實夫・平良勝也

Epidemiological Surveillance of Influenza in Okinawa(2008)

Yukiko KOJA, Saneo SHIMOJI and Katsuya TAIRA

要旨: 沖縄県では、感染症の発生や流行情報を正確に把握し分析して、その結果を県民や医療関係者に迅速に提供、公開するため、「感染症の予防および感染症の患者に対する医療に関する法律」に基づき感染症発生動向調査事業を行っている。2008年の本県のインフルエンザの患者報告数は、13,660人の報告となり、前年比約4割程度に減少した。また、3年連続(2005~2007年)に認められた顕著な夏季の流行期は認められなかったが、定点当たり1.0~3.0レベルでの発生は続いた。

Key words: インフルエンザ, 感染症発生動向調査, 2008年

I はじめに

感染症発生動向調査事業は、「感染症の予防および感染症の患者に対する医療に関する法律」及び「感染症発生動向調査事業実施要綱」等に基づき、対象となる99の感染症について、患者発生状況を医療機関から所轄保健所に報告、県健康増進課で集約したデータを感染症情報センターで解析を行ない、保健所及び関係医療機関等に還元している。

今回、2008年におけるインフルエンザの発生動向について解析したので報告する。

II 方法

1. 感染症発生動向調査事業

58 定点医療機関から各保健所に報告されたデータは感染症情報センターに電子データとして集約され、当センターにおいて解析を行った。今回の報告は2008年インフルエンザの患者発生状況のデータを使用した。

III 結果

2008年の年間報告数は13,660人であり、過去10年間で最高となった前年の32,412人と比べ、約4割程度に減少し、報告数やピークの高さは過去5年間の平均報告数を下回るものであった。

本県の年次別報告状況の推移では、2003年以降、毎年冬季に10.0人/定点(注意報発令開始基準値)を超えるインフルエンザ流行がみられるが、特に2003年、2005年、2007年と2年おきの冬季に30.0人/定点(警報発令開始基準値)を超える大きな流行となる傾向がみられる(図1)。

また2005~2007年には冬季の他に夏季に流行する傾向がみられたが、2008年の定点当たり報告数は、3月(11週)をピークに、5月~8月上旬まで1.0~3.0人/定点で緩やかに続い

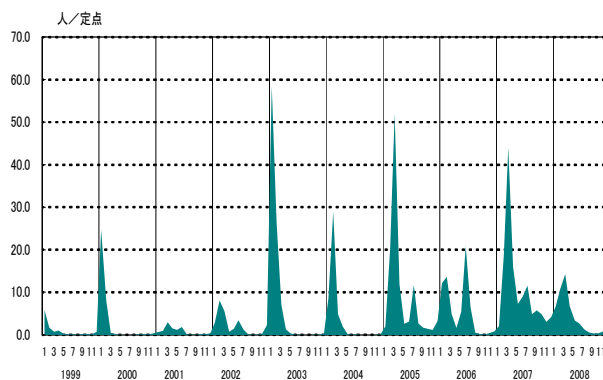


図1. 年次別報告状況の推移

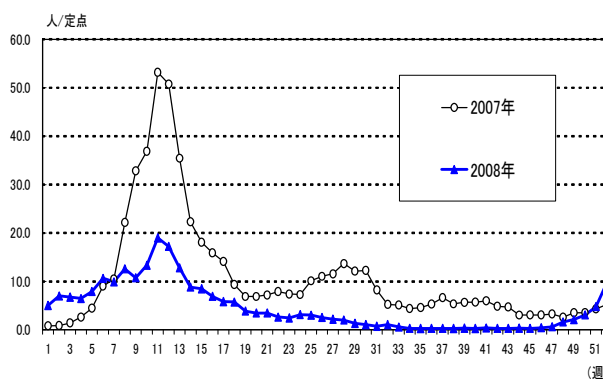


図2. 定点当たり報告数

た。夏季に再び患者が増加する現象はみられなかった(図2)。

2008年における報告数減少の要因として、①夏季に流行がみられなかったこと、②2008年冬季の流行は患者数が減衰する時期に当たっていることが挙げられる。

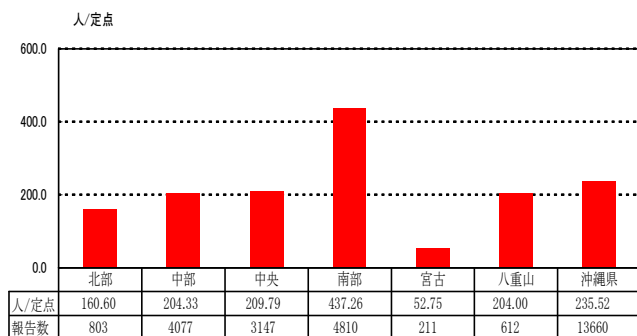


図3. 保健所別報告状況(人/定点及び報告数)

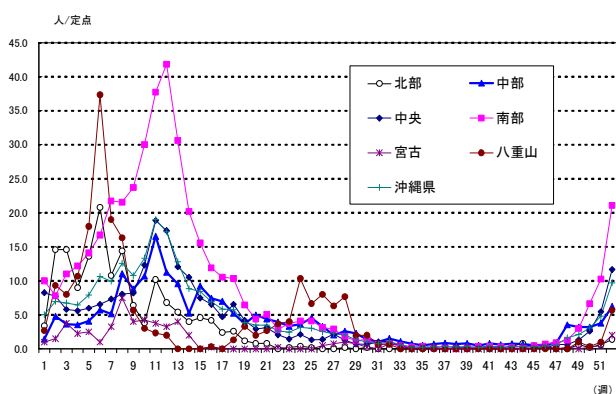


図4. 保健所別週別定点当たり報告数

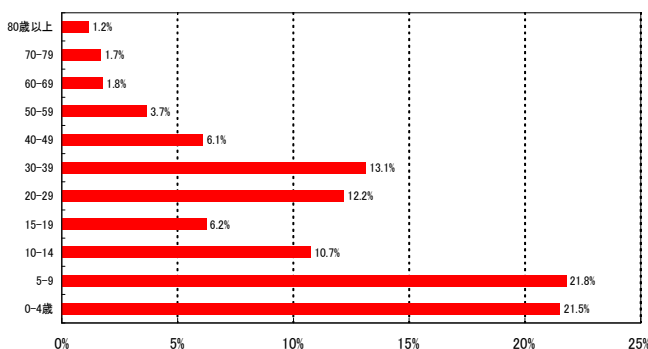


図5. 年齢階級別報告割合

保健所別定点当たり報告数の最多は南部で、次いで中央、中部、八重山、宮古の順となった(図3)。南部は2004年より連続最多となっている。

保健所別週別定点当たり報告数では、南部は第12週がピーク(41.82人/定点)で最も大きく、警報または注意報が発令される期間(1週～18週)が最も長く続いた。中央は第11週がピーク(18.87人/定点)で、中部は第11週がピーク(16.55人/定点)で、北部は第6週がピーク(20.80人/定点)で、八重山は第6週がピーク(37.33人/定点)であり、それぞれ第10～14週、第8～12週、第2～11週、4～8週の期間に断続して注意報が発令された。宮古は、10.0人/定点を超えることはなかった(図4)。

年齢階級別報告割合では、2008年は、5-9歳(51.28人/定点、年間報告数2,974人)が全体の21.8%と最も多く、次いで0-4歳(50.69人/定点、年間報告数2,940人、全体の21.5%)、30-39歳(22.52人/定点、年間報告数1,306人、全体の13.1%)と続いている(図5)。

インフルエンザウイルス分離状況¹⁾では、2008年中、当研究所衛生科学班への検査依頼が59検体があり、うち57件からインフルエンザウイルスが分離された。

分離されたインフルエンザウイルスは、2008年1月までは前年夏季に流行したAH1亜型のみであったが、2月にはB型が多く分離され、3月にはB型、AH1亜型、AH3亜型の混合流行となった。4月以降はB型とAH3亜型で推移したが12月にはAH1亜型とAH3亜型が多く分離された(図6)。

以上の様に2008年夏季は、過去3年のような流行増はみられなかった。この理由は明らかでないが、本県の多様な流行像を理解するためには、分離ウイルスの解析を含むインフルエンザウイルスのサーベイランスを継続することが重要であるとしている。

IV 参考文献

- 1) 平良勝也, 糸数清正, 久高潤, 中村正治, 仁平稔, 岡野祥 (2009) 沖縄県における病原体検出状況(平成20年度). 沖縄県衛生環境研究所報, 43: 171-174
- 2) 平良勝也・岡野祥・仁平稔・糸数清正・久高潤・中村正治 (2008) 2007/08シーズンのインフルエンザ流行ー沖縄県. 病原微生物検出情報月報, 29(11): 309-310

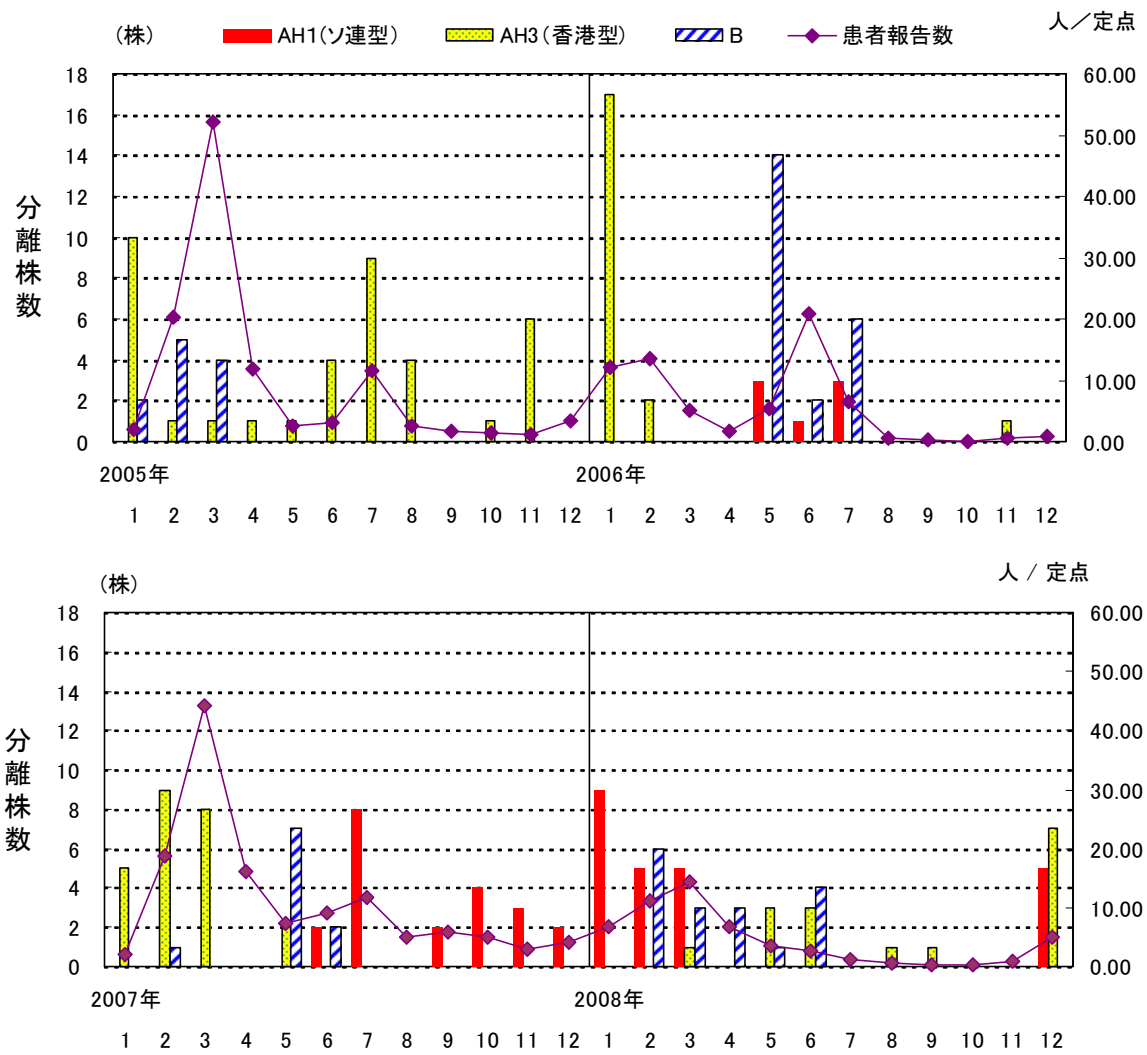


図6. 月別インフルエンザウイルス分離状況と定点当たり報告数 (2005~2008年)